はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長／学園史資料室長
大月　康弘

ここに『一橋大学創立150年史準備室ニューズレター』第5号をお届けします。

本ニューズレターは、学園史資料室と一体になって活動する創立150年史準備室の活動状況をお伝えするメディアとして、2015年に第1号が発刊されました。

爾来、両室で収集してきた一橋学園史関連の諸資料についてのレポートや、一橋に関する学内外の諸活動についての研究報告を掲載しています。本学卒業生の皆様からも多大な関心を寄せていただいており、今や、創立150周年（2025年）に向けてのプラットフォームとして、その機能を発揮しつつあるかと思います。

ご覧の通り本号にも、力作玉稿を掲載することができました。関係各位のご賛同により、興味深い論考を掲載できたことに感謝します。また執筆者各位には、心より御礼を申し上げます。

本号には、前号から始まった「事始め」シリーズの第2弾として、烝場準一、中村喜和、井上義夫、松岡弘の各先生からご寄稿いただきました。「研究事始め」ばかりでなく「教育事始め」もまた一橋のかけがえのない歴史の一齣であることから、松岡先生には、その嚆矢として本学での「日本語教育事始め」を執筆いただきました。本学の国際化を、教育システム面での主柱となって支えてくださった先生のご奮闘に、ここで改めて敬意を表したいと思います。

本学での学問成果は、ゼミナールを中心に行われる少人数教育から生まれたといっても過言ではありません。一橋の学問は、社会科学、人文学を中心として、ほとんどが個人的な研究作業の成果です。ただ、多くの場合、教師と学生の個人的な知的交流のなかで、その「芽」が吹いています。このことは、一橋の知的環境を語る上で逸することのできない特長であり、「事始め」シリーズでも大いに語っていただいているところです。が、コトは学問に限ったことではありません。本学ゼミナールの実績は、実業界に羽ばたいた諸先輩の実社会のおける活動でも多彩に顕れています。卒業生の多くの皆さんが、社会のうねり（動態）を直感的かつ分析的に認識し、種々の新しい企て（事業）を多く興してこられました。この方面で本学ゼミナール制度が果たした影響も、また銘記される必要があるでしょう。

このことから、本号より「ゼミナールの肖像」を開始しました。幸いにして、島村髙嘉、堀地史郎、両先輩からご賛同をいただき、誠に有難いご寄稿を得ることができました。両先輩は、昭和30年卒のご同級でおられます。中山伊知郎、山口茂というそれぞれの碩学から公私にわたり薫陶を受けられ、実社会で活躍なさいました。学部を越えたご学友でもあ

る点で、昭和20年代の学生・教師間の濃密な人物群像を、より立体的にお教えいただいた感があります。

本号には、そのほかに、元学園史資料室員・大場高志氏からも本学と「くにたち本の会」の交流に関わる珠玉の寄稿をいただきました。当室長・大月も、当室に新着の資料に関する速報的レポートを寄せました。

さて、当室では、東京商科大学時代から戦後の一橋大学にかけての知的環境に関する諸資料の収集に努めています。特に、太平洋戦争に突入していく昭和10年代の情況を伝える資料が、実のところあまり収蔵されていないことを懸念しています。現在、附属図書館が『一橋大学新聞予科版』のデジタル公開化を進めていますが、それを除くと、当時の様子をリアルかつヴィヴィドに伝える資料は、実のところあまりないのです。本ニューズレターを手になさった読者諸賢からの情報（資料）提供を、お願いする次第です。

ともあれ今後とも、汲めども尽きぬ一橋学園史の魅力に触れていく機会をもちたいと思います。益々のご支援、ご叱咤をお願い申し上げます。